1992年 5月

WIN CONCORD コンコード NEWSLETTER

WINコンコード発足一周年を迎えて

代表　磯野英徳

WINコンコード発足後一周年が過ぎました。この間会員の方々を始め、多方面に亘る人々の御協力により、何とか頑張ってこられたことに、心から感謝申し上げます。

和歌山県下の留学生も、徐々にではありますが増加しております。でも留学生の方々が国に帰った時、どれほど、和歌山のことをすばらしい土地だったと話せてもらっているか、少々心もとなく思っています。

我々の活動は、決して目立つことなく、縁の下の働きに尽きますが、国に帰った留学生の心の片隅に、いい思い出として留めていただき、何かの時に、国の人々に和歌山のことを好感を持って話せてもらえる、そのようなお役に立てれば幸いだと考えております。

日本人は、ボランティア活動が下手だといわれています。昔に比べ、大人になったら社会のために働きたいと考えている子供が、極端に少なくなっているようです。他人を押し退けることのみを教わる受験戦争の弊害かもしれません。しかし、ボランティア活動、無償の社会奉仕が、人と人との心のかよい合う地球を作るために、どれほど大切なものであるかということは、あらためて申すまでもございません。我々の活動が、留学生にお役に立てることはもちろん、日本の子供たちに、ボランティア活動というものの意味を正しく理解してもらうための、ひとつのいい具体例になれたらと考えています。

新たな二年目に向け、皆様の一層の御支援をお願いし、また留学生の方々が、充実した和歌山での生活を送れることをお祈り申し上げます。

「わかやま」を 第二のふるさと に

－ホームステイより気軽なホームビジット－

橋 爪 文 雄

（和大・留学生アドバイザー）

「和歌山はとても田舎だし、交通の弁が悪い。外国人留学生も少ないし、アパートの人達は、あいさつしても口を利いてくれないし、日本人学生は話しかけるとどこかへ行ってしまう。町のドブ川はトイレの臭いがする。東京、大阪、京都、神戸などの大学に留学したかったのに運悪く和歌山にされてしまった。」

これが外国人留学生たちが和歌山に来て最初に感じる和歌山に対する印象の率直な意見である。

ところで、今から数年前までは、和歌山の留学生の受け入れが、年間僅か一人か二人という全国最低の数字であった。

（注）留学生とは、法律上、高校生や国際交流の短期研修生などを除く、大学学部、大学院、短大への留学生のことです。

その後、和歌山大学では、経済学部での留学生受け入れが急速に拡大して、日本の文部省の奨学金による国費留学生が、大学院（経済学研究科）に年間１２．３人を数え、ほかに私費留学生や外国政府派遣学生も見られるようになって来たのです。そして今では、教育学部にも学部学生や研究生などが１０数人を越えるまでに拡大して来ました。和歌山も遅まきながら国際化への仲間入りをしようとしています。

このような和歌山の状況の中で、志ある人達の発起によって、昨年７月、ＷＩＮコンコード（WIN CONCORD）が和歌山への外国人留学生の支援を主たる目的にして発足し、善意ある市民の方たちがメンバーとして参加され、その善意と友情を留学生たちに注いでくれることになったことを、私はとても嬉しく思います。

その後およそ１０か月、ホストファミリー（里親）を申し出てくれる人、留学生のホーム・ビジットを受け入れてくれる人、留学生たちの新入学生のアパートの借り入れ、転宅、洗濯機、冷蔵庫、自転車、テレビ、ベッドなど、彼らの生活用品のありとあらゆるものの世話、そしてめでたく卒業して帰国する留学生たちの帰国荷物の発送や運搬までをも快く引き受け、世話してくれました。

和歌山に来る外国人留学生たちは、このようなみなさんの貴重な善意と友情に包まれて、安心して和歌山での留学生活をエンジョイすることが出来るようになりました。

ここで、お許しを願って、留学生たちがホストファミリーの方々や、ＷＩＮコンコードのメンバーの方々に望んでいることを率直に申し上げると、出来るだけ早い時期にホストファミリーを指定してもらっておけば、彼らがホームシックにかかったり、自転車やテレビなどを欲しいと思ったり、また生活のことで誰かに相談したいと思ったときなど必要とするときに、電話などで気軽に相談にのって貰うことが出来る。また、ホームステイにこだわらず、日曜に限らずにあらかじめ電話などで日時を相談して、メンバーのお宅を訪問し、日本の普通の家庭の生活を体験したり、日本の普通の家庭料理を楽しんだり出来るようになればいい（ホーム・ビジット）と、留学生たちは思っています。

「せっかく日本に留学したのだから、日本語を覚え、そして普通の日本の人達と話しをし、ごく普通の日本人の生活やものの考え方などを知ることが何よりも大切です。そして、和歌山があなたの第２のふるさとになってほしい。」

それが外国人留学生に対する私達の願いなのです。

これまで世界の数多くの国々からの留学生たちを迎え、そして送って来ました。これまでは主として大学院への留学生たちだったこともあって、2年間の経済学修士課程での研究、そして和歌山でのアパート生活、そして、めでたく修士の学位を修得して帰国する彼らが、

「和歌山に留学して本当に良かったと思っています。今では、心から、和歌山が私の第二のふるさとになりました。ありがとう。和歌山のことは、一生忘れないでしょう。ＷＩＮのみなさんによろしく」

と言って、それぞれの国へ帰って行く留学生たちを見送ることが出来たことは最大の喜びであります。国へ帰った彼らは、おそらく折りに触れ、時に触れて、回りの人達に日本のこと、そして和歌山での生活、楽しかったこと、悲しかったこと、色々な出来事を良い思い出話として語ってくれることを信じて疑わないのです。

また、彼らの中には、単に日本の企業は給料がいいからなどと言う理由ではなく、本当に日本が好きになって、日本の企業に就職して日本に残る者、本国に進出している日本企業に職を求める者などが出て来ました。中には大変な就職競争を突破して大企業に就職出来た者もあります。また、将来自分の子供や親戚の子供たちをぜひ日本に留学させたいと望んでいる者もあります。

私達の住むこの和歌山では、他の府県に比べると、まだまだ数少ない留学生たちですから、この留学生たちを通しての「善意と友情の輪」はいまだ小さなものですが、これから年を経るに従って、留学生の数が更に増えて行くことは間違いのない事であり、この国際交流の善隣の輪が、さらにさらに大きく広がっていくことを確信しています。

ＷＩＮコンコードのパーティーに参加して

山下　礼

コンコードの総会の後で開かれた、第１回目のパーティーで、私は一体どんな人達が来るのかととても楽しみに会場に向かった。きれいにセッティングされたテーブルにくじ順につくと、早速、隣り合った人達とあいさつを始めた。そして各国からの留学生達が、自分の国の紹介をまじえた自己紹介をしてくれ、私達は彼らの日本語のうまさに感動しながらも、後に行われるクイズにそなえてメモをとったりしながら、一生懸命にきいていた。

出席者は、私のような学生から社会人の方々迄、年令、職業ともに様々だったけれど、クイズ、ゲーム、食事、おしゃべりなど和やかな雰囲気の中、留学生も日本人もとても有意義なひとときをすごせた。

Picnic In Autumn

Parichat Kanchanavareerat

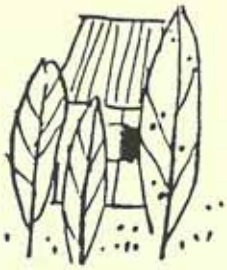
Last autumn, when the maple leaves were about to turn red, foreign students of the Wakayama University were invited to a picnic at Kada National Park with some of the Japanese Host Families. We had lunch together at a restaurant there, and after that we went out to the wide open-aired lawn for a picnic. We played many games including badminton and volleyball. There, Benjawan and I were introduced to the Matsubaras and the Kuriyamas. We enjoyed ourselves very much playing with their little children. That evening, we were invited to the Kuriyamas' place. We had delicious dinner with them and the Maeda who is also a member of WIN CONCORD. Mr. and Mrs. Kuriyama have a very interesting hobby, that is to study seven languages naturally. They are leading members of the Lex. Hippo Family Club, Wakayama branch. Late that night, Mr. Kuriyama, accompanied by his two little children, drove us back home. We were quite impressed with that joyful day and would like to say thank you to all WIN CONCORD's members. Special thanks to all those who participated in WIN CONCORD Host Family Program.

秋のピクニック

カンチャナワリーラット・パリチャート

昨秋、紅葉が赤く色づくころ、和歌山大学の外国人学生たちはホストファミリーと共に加太公園のピクニックに招待され、そこでみんな一緒にレストランで昼食をとり、そのあと芝生の公園でピクニックを楽しみ、バドミントンやバレーボールなどのゲームをした。ベンジャワンと私はその時、松原さんと栗山さんに紹介され、さっそく彼女たちの子供たちとお友達になってしまいました。ピクニックのあと、私たちは栗山さん宅に招待され、栗山さんの家族と、ＷＩＮコンコードのメンバーの前田さんとおいしい夕食をいただきました。栗山夫妻は、７ケ国語を学習するという大変興味のある趣味を持っていて、和歌山ヒポファミリークラブ（言語交流研究所）のメンバーです。そして、夜がふけるまで話し込んでいた私たちを、栗山さんが小さな二人の子供をつれて車で私たちのアパートまで送ってくれました。私たちはとても楽しい一日を過ごせたのはＷＩＮコンコードのメンバーのおかげだと思い、感謝しています。ＷＩＮコンコードのホストファミリープログラムの方々にとても感謝しています。ありがとうございました。

（訳　林　良昭）



「サワディッカ」

栗山和美

和歌山大学で勉強しているプイさんとミャオさん。WINコンコードの紹介で、彼女たちと加太で会うことになりました。皆、顔立ちがよく似ているから、どなたなのかしら．．．と思っていると、どうやらお隣の方らしい。

まず最初のひとこと、何と話しかけようかしら。やはり、その人の国のことばで話すのが一番嬉しいだろうな、と思いきって「サワディッカ」と話しかけてみました。すると、プイさんが本当に嬉しそうにニコニコしながら「タイ語がわかりますか？」と答えてくれました。「サワディッカ」のひとことで、プイさんと私の心の距離は、グンと近づいたと思います。改めて「サワディッカ、チャンチュ　カズミ　クリヤマ」と自己紹介すると、ニコニコうなづいてくれます。子供たちも彼女たちの笑顔につられて、「サワディッカ」と挨拶をかわします。はずみでおしぼりを落としてしまったら拾ってくれたプイさんに「コップンカ！！」「どういたしまして」と答えてくれると、自分の言ったことが通じる嬉しさから、何回もくり返し「コップンカ」の連発。

こうして、ほんの2つ3つのタイ語が、彼女たちの心の窓をひらいてくれたのだと思います。

公園で遊んだあと、彼女たちが我が家に遊びに来てくれました。友達家族も招き、大勢でワイワイ、ガヤガヤ、鍋料理を囲みながら、話がはずみます。そのうち子供たちが、日本語とタイ語を使いながらジャンケンを始めました。そう、彼らにとってはことばが喋れる、喋れないということ以前に、この人と遊びたい、お友達になりたい、という気持ちが強いのでしょう。彼女たちも兄弟のことを思い出すのか、とても楽しそうに遊んでいます。こういう風景を見ていると、インターナショナル（国境、民族を越えて）な世界を感じます。私たち家族にとって、タイは地図上の国ではなく、お友達のいる国となりました。彼女たちも、日本人の家庭に来たのは初めてということで、とても喜んでくださり、本当に楽しい一日となりました。

キャリーウーマン

谷口美寿々

「貴方のまわりに、まだまだ使えるけれど、もう必要でなくなった机、椅子、本箱、自転車、ふとん、電気製品など、生活必需品はありませんか。もしありましたら、留学生のために提供していただけませんか？」という私達のお願いに大勢の方々が御協力下さり心から感謝しています。

最初は協力品の置き場所もなく、知人の留守宅をお借りしていました。難民救済活動と間違えられたり、夜間荷物を運ぶので不審に思われたり、エレベーターのない4階からの家具の運び出しに目をまわしたり、連絡いただいた家を探すのに道に迷ってしまったり色々な事の連続でした。おかげ様で少しづつですが、活動も軌道に乗ってまいりました。

まだまだ、自転車、テレビ（これはホームシック予防と日本語学習に必要）小型本箱など不足品がいっぱいあります。御協力下さい。
また、電気製品の修理のできる方、荷物の運搬をして下さる方など私達の力に加わって下さると嬉しく思います。

これからも留学生の皆様が、和歌山での学生生活を有意義に過ごす事ができるよう一生懸命お手伝いしますので、よろしくお願いします。

Toyota Study Tour

Benjawan Nimmanonda

The very first trip of the year 1992 for foreign students at Wakayama University was organised and fully sponsored by WIN CONCORD during January 21-22, 1992. At 7.20 a.m. on Jan 21, we started off for a two-day-one-night excursion tour led by Mr. Goto and Ms. Nakatani from Wakayama Shiminkaikan by a comfortable coach. The number of foreign students joining this trip was fifteen with two Japanese tour leaders. As our main aim is to make a study tour at the leading automobile company in Japan, the Toyota Motor Corporation at Toyota City, Nagoya, this trip would not have been successfully arranged without great help in coordinating with the company by the president of the Toyota Vista Wakayama, Mr. Kaise who also accompanied all the way until we left Toyota. During the long journey, most of us dozed off to make up for the exceptionally early wake-up in that morning while the rest kept talking. For those who were hungry or thirsty, canned drinks and ONIGIRI were served.

We arrived at the Toyota Motor Corporation at around 12.30 a.m. according to the time scheduled, and were shown the way to a well decorated hall. There we were warmly welcomed by the company Public Relations Director and staffs. Delicious Japanese lunches were provided for everyone. This was confirmed by a one-year-and-eight-month-old Hungarian boy, a very cute child of the Aghs (one of the foreign students), who said the word OISHII with a very loud voice. While eating, the director who is evidently well-rounded and interesting, kept on asking us about our countries and our studies here in Japan. After lunch, he began to give us the story of the Toyota company, how it has been established and managed. A lot of

useful and interesting information on Toyota was also provided in detailed and colorful booklets. A lot of questions were asked and answered, and I am sure that all of us benefitted from the discussion. After lunch-talks, we were guided downstairs to Toyota Kaikan Exhibition Hall, where new models of Toyota cars are displayed. There are also the exhibition of autoparts, future cars, and a high-tech corner where we could design cars according to our own imagination. Then we went on for factory tours to Kamigo Plant which has been operated since 1965 with present capacity of producing 7,700 engines/day. The most interesting point was that this plant is almost fully automatic with robot assembly line accounting for 96% of the productivity. There are only one or two men at this plant. Next we were led to the car body assembly factory known as Motomachi Plant which has been operated since 1959 with the present capacity of assembling 1,000 cars/day in four models, i.e. Crown, SC400, Soarer, and Mark II. This plant is also interesting in that all the perfect works are carried out systematically on the continually moving conveyor belt with only two or three men at each point. As there was a company girl who can speak good English leading us to these two factories, we could gain a lot from this knowledgeable trip.

At around 5.00 p.m., we left Toyota and headed back to Mie Prefecture where we would stay overnight at NTT lodging. Two hours later we reached the destination tired and hungry. After a check-in, we had dinner together. We chatted and played some games and a quiz before saying OYASUMINASAI to one another. Thanks to being given a separate room, all of us could rest and sleep very well to be fresh for the following day's ski trip.

In the morning, after having breakfast, we started off promptly for Gozaisho in Mie. About two hours later, we got there and changed into ski wear (also provided by WIN). We rode a cable car up to the top of the mountain. The temperature was as low as 0 ℃. We rented the ski equipment, walked with difficulty to the ski slope, and began to learn the art of skiing. Some of us were quick and could ski pretty well while others could just slide for only a few meters and after fell down. Anyway, all of us enjoyed ourselves so much. We had about a one-hour break for lunch in a restaurant there and continued skiing, this time a little bit better. Although we did not want to, we had to leave Gozaisho for Wakayama at 4.00 o'clock. Because of the traffic jams, we got to Wakayama City at nearly 9.00 p.m. tired yet joyful.

This trip is a memorable one as it was the first time almost all the foreign students made a trip together, and surely it was very knowledgeable. Great appreciation is to be given to all WIN CONCORD members, and we hope we can have this kind of opportunity again with the coming new foreign students. Thank you very much.

トヨタ研修旅行

ベンジャワン・ニムマーノン

和歌山大学の外国人留学生にとってまったく初めての旅行が、ＷＩＮコンコードの協力のもと、今年１月２１、２２日の両日にわたって行われました。初日の朝７時２０分、後藤さんと中谷さんと共に、私たちは市民会館を出発しました。旅行に参加したのは、１５名の外国人留学生と３名の日本人同行者の計１８名です。この旅行の主な目的は、日本の一流自動車会社であるトヨタ自動車株式会社を見学することで、この企画は、私たちが豊田を出るまで同行してくれたトヨタビスタ和歌山㈱社長、海瀬様の協力がなかったら実現しなかったでしょう。豊田へ着くまでの長い間、朝が早かったので大部分の人たちは、うたた寝をしたり、その他の人たちはおしゃべりをしながら、おにぎりを食べたりジュースを飲んだりしました。

１２時３０分ごろ、私たちは予定どおりトヨタ自動車株式会社に着き、きれいに飾られたホールへ続く通路に出ました。トヨタ会館パブリックコミュニケーション広報部長ほか数人の職員にあたたかく迎えられ、皆は大変おいしい日本料理を頂きました。一才八カ月のかわいいハンガリーの子供が「おいしい」と日本語で叫びました。その部長はいろいろと物知りで、食事の間、私たちの国のことや私たちの日本での勉強のことをいろいろと質問しました。食事の後には、トヨタ自動車株式会社の創立当時のことや経営のことなど、いろいろと私たちに説明してくれました。トヨタについてくわしく書かれた、たくさんのカラフルなパンフレットも頂きました。よく説明していただいたので、みんな良く理解できたと思います。昼食後、私たちはニューモデルのトヨタ車が展示されている階下の豊田会館展示場に案内されました。そこには自動車部品類や未来の車が展示されていたり、自分の思いどおりの車がデザインできるハイテクコーナーまでありました。次に１９６５年より操業を開始し、現在日産７，７００台のエンジンを生産している上郷工場を見学しました。私たちがもっとも興味を持ったことは、生産ラインの９６％がロボットによって、ほぼ全自動で生産されていて、工場内には一人か二人の従業員しかいなかったことです。次に、現在４種類の車（クラウン、ＳＣ４００、ソアラ、マークⅡ）を日産１，０００台生産している１９５９年創業の元町工場に案内されました。この工場もオートメーション化されていて各箇所に二、三人の従業員しかいませんでした。これら二つの工場は、よくわかる英語を話すコンパニオンが説明してくれたので、私たちにとってとても有益な研修旅行となりました。

午後５時ごろ、豊田を離れ三重県のＮＴＴの保養所に向け出発しました。二時間後、私たちは、腹を空かし疲れて保養所に着きました。チェックインの後みんな一緒に夕食を食べ、「ＯＹＡＳＵＭＩＮＡＳＡＩ」と言って各部屋に分かれるまで、おしゃべりしたりゲームやクイズをしたりして過ごしました。その夜、私たちは翌日のスキーのためにぐっすり眠りました。

翌朝、朝食を終えすぐに御在所に直行。2時間後には御在所に着き、スキーウェアを着て、ケーブルカーに乗り込み、頂上へと向かいました。気温は零度近い。レンタルのスキー板をつけ、スロープをあぶなっかしく歩き、滑り方を習いました。幾人かは、上手だったが、大抵の人は2、3メートル滑っては転びました。でも、とても楽しかったです。約1時間の間、レストランで昼食をとって、また滑りました。今度はみんな少しうまくなっていました。私たちはもっと滑っていたかったのだけれど、交通停滞の心配があったので御在所を午後4時に出発しました。和歌山に着いたのは午後9時近くで、疲れてはいたけれど楽しい一日でした。

ほぼ全員の外国人学生がはじめて一緒に旅行できたので、この旅行は思い出深かったし、とても勉強にもなりました。私たちはＷＩＮコンコードの会員の方々にたいへん感謝しています。そして新しく来る外国人学生たちと共にこのような機会が持てることを期待しております。どうもありがとうございました。

（訳　林　良昭）

広げよう人の輪

小島 佳代子

先日、ラジオで耳にしたある人のひとことが、今思い出されます。それは、これからの高齢化社会を乗り切る一つの方法として、学業を終えた者が就職する前に、義務教育と同じように、老人の介護等の仕事を社会奉仕等として義務づけられないだろうか、との提案でありました。ある形をとって既に行われている分野もあるかも知れませんし、ボランティアが本来目ざしている道からは外れることになるかもわかりません。しかし、色々な問題はあるにしても、何か始めなければと、あれこれ思いをめぐらしている人がここにもいたわけで、それはまた同時に、私達に何かを考える機会を与えてくれたことに、大きな意味があると思いました。

ここ和歌山では、ボランティア活動に対する偏見さえある様で、まだまだ理解を得られていないのが現状ではないでしょうか。特別な人達だけ参加するのではないのですから、また、何をしているのかを知ってもらうことも、協力への第一歩なのですから、そのような方々にこそ、働きかけを惜しむことのないようにしたいものです。ボランティア活動に参加する人達の任務は、活動を続けることだけではなく、それ以上に、人の輪を広げていくことが大切な役目だと思います。私も、このように多くの留学生が来られていることをまだ知ったばかりですし、何か出来るとも思えないのですが、人の為に何かをするのではなく、すべてが自分自身の為だったと気付く日がいつか来ることを信じて、末端の会員の一人に加わらせて頂けたらと願っています。そして、留学生の方々がお国に帰る時、「日本は素晴らしい国だった。」との一言を心から言って頂くことこそが、私達の目標であると、改めて認識したところです。

留学生紹介

Josie F. Rayos del Sol (ジョシー)

Philippines　　Business Economics

I like sports. I've already tried many kinds of sports, but swimming is the recreation I like doing best. I also like dancing like modern and jazz.

I like travelling a lot, too. Combined with studying, it becomes more meaningful. Being here in Japan enables me to learn something about the business side of Japan as well as its culture, which should prove interesting. Learning languages is also one of my other interests.

Nguyen Thi Hong Thuy (トゥイ)

Vietnam　　経済

Agh Karoly

Hungary　　leasing

Thank you very much for all your work and kindness. I enjoyed the Toyota Trip of last year really very much. May we have anyother possibility to visit companies, please help us.

ベンジャワン　ニムマーノン

タイ国　　マーケティング経営

２５才のプイです。和歌山に来てもう一年たった。初めて来た時は寂しくてここにいたくなかったが、今は和歌山の生活に慣れて幸せです。時々帰国したくない感じがします。

All that WIN have done for us is great enough, but if there is something else we can ask for, I would appreciate it if a regular home-visit program were provided. This is just for the Japanese who don't mind our regular visit at their house every week, if possible. Through this, we can practice Japanese, exchange culture and understand the Japanese better.

カンチャナワリーラット　パリチャート (ミャオ)

タイ　　労務管理

兄弟が四人います。私は長女です。和歌山の生活は大好きです。

Ekutu Bonzemba

Zaire(Africa)　　Business Administration

I'm a very religious (Jehovah's witness エホバの証人). So you can excuse me if sometimes in the future, I don't do something which is wrong to my Christian conscience guided by the Bible.

Anura Zoysa

スリランカ　　Management Accounting

I am a university lecturer by profession and professionaly qualified accountant. I hope to do my masters and PhD in Japan and continue to serve as a lecturer on my return to Sri Lanka.

岳　小妹

中国

私は、中国の北京から日本へきて、今年四月に和歌山大学大学院に入りました。私の専攻は経済学で、土地経済論をテーマにし、勉強しています。

Wang Zhi-min (王　志敏)

China　　Human Resource Management

金　美鏡

韓国　　日本近代経済史

大学の専門：日本文学　前の職業: 高校の日本語教師

趙　鶴鳴

中国

中国上海から来ました。二年間大阪の日本語学校で勉強した。昨年、和歌山大学教育学部、教員養成過程に入りました。社会学専攻を希望する。

賀　真

中国　　生涯教育

許　亜軍

中国

私は北京体育大学三年生から和歌山大学教育学部研修生として留学しています。日本に来てからもう一年になります。

張　崑

中国　　教育学

私は中国から来た。今年二年目になり、切手の蒐集、旅行、料理研究などが好き。

中国語を習いたい人を紹介してほしい。もちろん有料です。勉強して一緒に中国へ旅行しよう。

ノルシャム　シャザリ

マレーシア

私はマレーシアからの留学生で、イスラム教徒です。和歌山大学の経済学部の一年生です。

Mohamad Asri Mahat

Malaysia　　Business Management

Give more information for students how to study here. Make a relationship among the students. like through sport and camping.

朴　炳成

韓国　　経済学部

韓国から来た、私費留学生です。国では、貿易会社で勤務したことがあってそれを中心とする勉強をしたいと思っております。

フィレモン　アントニオ　ファハルド（トニー）

フィリピン　　Economics

Mohamad Bin Harun

マレーシア　　農業経済

Endera Arachchige Weerasinghe

スリランカ　　経済

羅　維之

中国　　医学

私は、日本の先進な現在医学の勉強するために、４年半前に中国の上海から日本に参りました。２年半にわたって、東京にある言語学院に通って、日本語を習いました。おととしの７月に和歌山県立医科大学の衛生学の研修生になって、昨年の４月に大学院生になりました。

A Farewell Thank-you

Vatchara Thitithanyanont

It has been a month since I've left this town, Wakayama! Nakatani San has been asking me several times to write something for the Win newsletter. I used my master things as a good excuse to get out of doing any extra work. This time she asked me to write something for the WIN Concord newsletter. I am not very lucky this time since I'm the only student who didn't return home right away after graduation. Even I myself wonder "do I really love Japan that much?"

I came to Japan in April 1989 on a Monbusho scholarship as a research student. All of us were sent to several language schools (Tokyo gaidai, Osaka gaidai etc) to have some basic Japanese conversation for 6 months. After we completed our Japanese course we were sent to the university that Monbusho selected for us. In my batch, there were more than 150 foreign students coming from every where. We all came from different cultures and different back grounds but after all we became such good friends.

No one asked for cutural exchange, nobody talked about internationalization. Things just happened so naturally.

As many people say "We all meet to part." The honeymoon time in Japan ended soon after we finished Osaka gaidai. In my batch there were 5 foreign students coming to Wakayama. Two from Malaysia, one from the Philippines, one from Bhutan. All of us had almost the same level of Japanese - real beginner - and we shared one thing in common ; we didn't know much about this town. There was nothing like Win Concord or anything when we came. We came in October which was not the time to look for apartment near the university since the students who live there would move only during the beginning of the semester. Besides, there were much fewer apartments than students.

Almost all of us had to depend on Fudosan. I'd like to mention here that the house renting system in Japan is unique and quite difficult for foreigners to do by themselves without help from the Japanese. It is such a big decision since the key money is a lot of money for us. Remy and I went to see Fudosanyasan by ourselves. With 6 months of Japanese, you can imagine how much we could communicate.

Time flies. We all managed to graduate. 3 years in Wakayama was a valuable experience for me. The first year in Wakayama I didn't have any Japanese friends. I had wanted to be friends with the Japanese, but I just didn't know how. To be honest, I didn't like this town in the beginning. I felt so lonely and bored. The second year when I became busier with school and got to know some Japanese, my life here had become much more pleasent to live. Without support and encouragement from my friends, I wouldn't have been able to come this far.

I wish that all my 'Kohai' wouldn't have to

experience what I have been through. I wish them an easier path, and that they could love this town from the beginning. I also wish that WIN Concord will stand together with Wakayama to help and support foreign students and to help better understanding between Japanese and foreigners.

As a representative of Wakayama university graduate students, I would like to use this opportunity that Nakatani San gave me to express my deepest gratitude to you all.

大学での４年間は長いようで短いかもしれません。たとえ、留学生活がつらいと思うことがあっても、信念をもって頑張り通すことが、私の国中国にとっても、私自身の将来にとっても役立つことだと思っています。大学は私にとって最終の目標ではありません。大学は社会の出発点です。

みなさん、ＷＩＮコンコードが留学生と日本人をつなぐ架け橋として、今後もっと発展することをお祈り致します。

みなさん、よろしくお願い致します。

初めまして

賀　真

私は中国の湖南省から来た留学生の真（シン）です。私の日本での生活は、１年半前東京のアジア学生文化会館で始まりました。今年四月、和歌山大学の教育学部に合格しました。これから生涯教育の生活環境を専攻するつもりです。そして将来、教育を受けられなかった人達が高い質の生活をおくれるよう手伝いたいと思います。

和歌山へ来る前、環境もいいし、留学生と交流が盛んだと先生から聞きました。それで、私は和歌山大学を勉強の場として選びました。

和歌山へ来てもうそろそろ一ケ月になります。和歌山大学の先生と和歌山の市民の方々にいろいろなことを手伝っていただきました。何回も私の住んでいる所に家具を持って来てくださったり、私の生活が困っていないかどうかととても心配してくださいました。深夜の来訪は珍しくありません。本当にありがとうございます。

引っ越しマン

後藤芳則
（事務局）

私がＷＩＮコンコードのお手伝いを始めて９ケ月になります。最初は何をするんだろうと思いながらも引き受けていたのですが、３月になってやっと分かりました。答えはズバリ「ザ・引っ越し」（ＨＩＫＫＯＳＨＩ）！　３月から４月上旬の間に十数回の荷物を運ぶことが私の主な任務でした。

３月に入ると、事務局長の中谷さんからのラブコールが急に増えました。その上、電話にはいつも同じ「ゴッチャン（私の略称）今度いつあいてる」の言葉が入っていたのです。卒業する留学生や、会員の皆さんから寄付していただいた生活用品は、ＷＩＮコンコードの磯野代表の生家（加太）をお借りして保管しています。寄付してもらった品物を加太へ、入学して来る留学生のアパートへと持っていく繰り返しでした。かくして、４月はサロンパスと腰痛バンドが親友になってしまいました。

しかし、この「引っ越し」は私にとって意義深いセレモニー（？）でした。別れていく留学生の嬉しさと寂しさの入り交じった笑顔や、今春入学した学生のアパートへ荷物を入れ終わった後の彼らの不安と希望が交錯した笑顔、また帰っていく留学生が目を輝かせて「和歌山へ来てよかった。本当に有り難う。是非チャンスがあれば訪ねて来て下さい」という言葉など、私の心に強烈な印象として残り、本当にこの活動に参加してよかったと思っています。

もう一つ、つくづく考えさせられたのは、私達が如何に物を粗末にしているかということでした。私達が普通ならとっくに粗大ゴミに出しているような自転車や家具が、次から次へと留学生に引き継がれ立派に役立っているのを見て、私達が何気なく捨てていることを考えると恥ずかしくなります。

４月の引っ越しは終わりましたが、「次は１０月よ」という中谷さんの言葉に、足腰を強化せねばと考えている昨今です。会員の皆様の積極的な参加（労働協力）を是非お願いします。

平成３年度ＷＩＮコンコード活動経過

１０月　６日	ホームパーティー	海瀬宅
１０月１２日	第１回総会・交流会	県　文
１１月　９日	ホストファミリー交流会	加　太
１月　２日	ホームパーティー	後藤宅
１月１１日	〃	中谷宅
１月２１～２２日	企業訪問（トヨタ自動車）	バ　ス
１月３１日	引っ越し	キ　ム
２月２４日	〃	ﾜﾝﾁｭｸ
３月　５日	ﾆｭｰｽﾚﾀｰﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	中谷宅
３月２３日	引っ越し	アリサ
３月２９日	〃	ｱﾇｰﾗ
３月３１日	〃	ﾚﾐ・ﾄﾆｰ

「ベトナム」について

NGUYEN THI HONG THUY

ある雑誌を読んでいると、日本とベトナムについてとても興味がある記事が載っていましたので紹介したいと思います。

「インドシナ半島から見えてきた日本の役割」
— ベトナム現地報告 —
高　野　孟
国際ジャーナリスト、インサイダー編集長

今年始め、私はベトナムを訪れたが、インドシナ半島におけるこの国の存在の大きさを痛感した。たとえば、街角でよく見かけるフランスパン、町のあっちこっちにゴタゴタと汚い食料品市場があるが、不思議とパンだけはきれいに焼きあがったフランスパンが並んでいて、これがとてもおいしい。フランスの植民地時代名残りというものを、キチンと自分のものにして残しているし、旅行に付き添ってくれたガイドさんなんか、突然漢詩を読み始めたり、美しい女性を見つけると即興のラブソングを書いて送ったりと、ベトナム人の民度の高さや文化の厚みといったものを感じざるを得なかった。さらに７５年までは南島分の地域で資本主義を経験している点、華僑を国内に多く抱える点、ベトナム戦争を勝ち抜いたという国民の自負心、組織力が強い点など、ベトナムの持つ潜在的可能性が私たちの想像以上に大きいものがあるといえる。

ベトナムで注目されるのは、８６年から共産党の公式路線となっているドイモイの革命だ。今回のベトナム訪問中、ドイモイの実験を目の当たりに見てきたが、旧ソ連ゴルバチョフやエリツィンなど、一連の革命が愚かに見えるほど、この国の革命が順調な成果を収めている。ロシアとウクライ

ナの再共和国では今年の１月２日から価格自由化をやみくもにスタートさせたが、猛烈なインフレに見舞われて、国民からの不満が高まっている。その点、ベトナムでは価格自由化の前に預金金利を１０数％という高金利に引上げ、国民のタンス預金を全部吐き出させインフレ退治に成功している。その過程をよくみると、先ず農業の自由化、続いて商業、流通の自由化、それから国営企業の革命、西側資本との合弁会社設立と、ひとつひとつのポイントを押さえながら進んでいる。今までのマルク経済には生産と消費はあったが、流通という概念がなかった。ところがベトナムのドイモイの場合、すでに８１年頃から流通というポイントをしっかり押さえて試行錯誤をしたうえで、８６年から正式のドイモイをスタートさせている。ベトナム訪問中、ドイモイの関係者自ら「ソ連は市場経済というものを何も分かっていない」という自身タップリの言葉を何度も聞いたが、市中のマーケットにあふれる品物の豊富さを見れば、なるほどそのとおりだ、とうなずかざるを得ない。

今ベトナムはＡＳＥＡＮへの加盟申請をしている。おそらく数年後にはベトナムはＡＳＥＡＮ中心国になるはずだ。ベトナムが経済的に復興をするということになると、おのずと隣国のカンボジア、ラオスへも波及していく。これを利をさとい日本企業が黙って見逃すはずがない。そのため、日本企業がベトナム向けのＯＤＡを織り込んで、つぎつぎと巨大なプロジェクトを提案できるからだ。事実、日本政府でも対ベトナムのＯＤＡを４月にも再開する意向という。さらに２８０億円にのぼる対ベトナム債権の帳消しも検討されているらしい。

日本はＰＫＯなどをやる前に、インドシナ半島全体の経済復興に手を貸すべきだというのが私の考えだから、もちろん対ベトナム向けＯＤＡの再開に異存はない。しかし、いままでのＯＤＡは日本企業の尻馬に乗っかり目先の儲け話ばかり食っていくという欠点があった。援助の実名のもとに相手国を手玉にとり、おいしい部分だけを日本がひとり占めするというようなことだけは、なんとしても避けなくてはならない。そのためには現在インドシナ３国に不足しているインフラ、たとえば道路や通信網といったものの整備をＯＤＡでやるべきだろう。

インドシナ半島を流れるメコン川には数億人の胃袋を養うだけの潜在的食糧供給の力があるという。２１世紀に爆発するであろう人工問題までもにらんで、日本による農業開発援助などがやれないものだろうか？　とにかく、インドシナ半島へのＰＫＯ論議をウンヌンする前に、日本としてはベトナム、ラオス、カンボジアの経済的復興の手助けを一生懸命にやる。そのほうがずっとアジアに対する日本の国際貢献になることは間違いない。」

この記事を読んで、私はベトナム人として日本の方達の中にはとてもよくベトナムを理解してくれる人がいるのだなと、とてもうれしく思いました。今後さらに、日本とベトナムの関係が進展することを願っています。

The Mt. Pinatubo

Josie F. Rayos del Sol

In the Philippines, there's at least one constant piece of news that always warrants front page item in newspapers/headline news on TV: the Mt. Pinatubo eruption. Everyday one either hears or reads of the misfortune which now has become a common occurrence for the townsfolk within the area - of houses, plants and crops and livestock being overtaken by lahar (a Japanese word meaning "a mudflow containing much volcanic

debris"), of people sometimes being buried alive in the mudflow, of wastelands becoming bigger and bigger.

Often recalled was the time when Mt. Pinatubo blotted out the heavens, converted three o'clock early afternoon in Metro Manila into an eerie seven o'clock evening, frightening the blase cityfolk and fooling the roosters to early roost, as the city witnessed a downpour of ashfall that lasted till the following day. It looked liked snow had finally arrived in the Philippines, a tropical Southeast Asian country.

A leading national pubication writes that the most dreadful feature of Mt. Pinatubo is that of contending with the overpowering forces of nature, before which even the world's best engineers and scientists cannot find a way to stop the mudflood. And unlike a typhoon or an earthquake, the calamity does not go away after a day or two. It hovers around for three to five years.

The Mt. Pinatubo eruption may not have killed many people here and there like the killer earthquake (July 1990). But it enclustered and smothered a whole region turning once productive areas into millions of hectares of uninhabitable land. The death it brings with it is a slow painful one - it kills their livelihood, depriving them of their trade, jobs, houses and farms without which life is not worth living.

A distraught housewife was said to have defined the horrible problem better than the volcanology scientists and government experts: "Our house has collapsed. Our farm is covered by two feet of sand. Our carabao has died. There's no rice for the family. We cannot plant. What shall I do? Who will feed my children?"

The havoc it has brought is of such a magnitude that already it is on its way (if not yet) to the Guinness Book of World Records as the biggest volcanic eruption in the century since Krakatoa whose explosion was heard by half of the world and whose ashes circumnavigated the globe.

The Philippines is located within a seismic belt called "Ring of Fire." which encircles the Pacific coasts of North and South America and Asia. The country has no less than 200 volcanoes, 14 of which are active. The Mt. Pinatubo eruption came as a surprise to all - everyone assumed it was extinct until its eruption last June 9, after having lain dormant for more than 600 years.

The eruption itself caused very little damage. However, the ongoing lahar flow will bury towns in Central Luzon and turn productive lands into desert.

The goverment it now doing all it can to evacuate the people in the towns affected and providing them with food, medication, and shelter during the period of emergency. Just feeding evacuees, averaging 120,000 everyday, according to the country's Department of Social Welfare and Development costs 49.5 million pesos per month (US$1.8 million).

The government alone, however, does not have what it takes to undertake adequate relief operation. It does not have the formula for stopping the mudflows, nor the money and time to put up the bridges (which are just as soon washed away by the lahar once repaired), nor the money and the system of feeding about a million people for months. The problem is of such a magnitude that the church and the private sector will have to be fully involved. Donors nationwide and abroad are being tapped to contribute to the Central Luzon Lahar-Mudflow Victims. Although thousands have already responded, much more needs to be done as the worst is yet to come. Up to when no one really knows. One of the immediate needs right now is the rehabilitation of the Pinatubo victims who stand helpless against the natural calamity which has befallen them. It is important for prospective donors to note that these evacuees are not charity cases. Rather, they were productive citizens who were victims of a natural disaster.

With this in mind, numerous appeals are being sent out to many places to help alleviate the plight of these people. Likewise, in Japan, the same appeal is being made to kind-hearted individuals/philanthropic groups who may wish to extend assistance to these victims. The need for such assistance cannot be overemphasized. These people are in dire need of help.

One force that could overcome the force or havoc of Nature is the force of the people. People Power, as the Filipinos call it.

Note: Contributions may be sent in through Ms. Kimiko Nakatani (53-0908) or Josie Rayos del Sol (54-5161).

ピナトボ山噴火

Josie F. Rayos del Sol

フィリピンでは、テレビや新聞紙上に繰り返しいつもヘッドラインに報道されるニュースが少なくともひとつある。それはピナトボ山噴火のニュースだ。家々や草木や作物や家畜までが土石流にやられ、人々が生き埋めになり、破壊された土地がますます広がり、今ではその地域の人々にとって日常の出来事となった災害を毎日、新聞で読んだり、あるいはラジオで聞いたりする。

ピナトボ山が噴火した時のことを人々はよく思い出す。マニラ市民が翌日まで続いた火山灰の襲来を目の当たりにしていた時、午後三時のメトロマニラを陰鬱な午後七時に変え、満ち足りて退屈した市民を脅かせ、おんどりは間違えて早い鳴き声を響かせた。それは熱帯の東南アジアの国フィリピンにようやく巡り着いた雪のようだった。

ピナトボ山噴火のもっともひどい面は、自然の圧倒的な威力との闘いであり、それは世界最高の技術者や科学者たちでさえ、土石流をくい止める方法を見つけ出すことができなかったと国際的な主要雑誌は報じている。台風や地震とは異なり火山噴火の被害は一日や二日では治まらない。三年か五年の間は続く。

ピナトボ山噴火で死んだ人たちは、１９９０年７月に起こった地震の時のようには多くないかもしれないが、その被害は広範囲におよび土石流に囲まれた地域を窒息させ、何百ヘクタールもの、か

つて耕作されていた土地を人も住めない荒れ地に変えてしまった。
噴火時にはたいした死者は出なかったが、その後副次的な困難をもたらす。人々の生計を絶ち、商売も仕事も住居も農地さえも奪ってしまった。人はそれらなしでは生きていく価値がない。

火山学者や政府専門家たちよりも、気が狂わんばかりに狼狽した主婦の方がその悲惨さをより明らかにしてくれる。「家はつぶされ、農地は６０センチもの砂に襲われ、水牛は死に、家族を養う米もない。何を植えればいいの。どうすればいいの。誰が私の子供たちを養ってくれるの。」

世界の半分の地域で報道され、火山灰が地球を回遊したクラカトア山の噴火以来最大のものとして、その被害はギネスブックに載ろうとしているほどである。

フィリピンは太平洋を囲むアジアと南北アメリカ沿岸にある環太平洋火山帯と呼ばれる地震帯に位置する。国内には２００以上火山があり、そのうち１４は活火山である。ピナトボ山の噴火はみんなを驚かせた、というのも昨年の６月９日に爆発を起こすまで、その山は死火山だと思われており、それより以前６００年もの長きにわたって休火山であった。

噴火時の死傷者は幸い多くはなかったが、なお引き続き起こっている土石流はルソン島の中央部の町並みを埋めつくし豊かな土地を不毛の地に変えるだろう。政府は被害を受けた町の住民を非難させ、非常事態を宣言し、今も食べ物や薬や避難場所を与えている。非難者だけで毎日平均１２万人にのぼり、社会福祉開発局からの報道によると一カ月４９５０万ペソ（１８０万ＵＳドル）ものお金を費やしている。

しかしながら、政府だけでは適切な救援活動を行うことはとても難しい。政府は土石流をくい止める方策を持っていないし、一度修理された橋もまた押し流され、再度建て直す猶予も金も持ち合わせていない。何カ月もの間百万人もの人たちに食べ物を与えるシステムも金も持ち合わせてはいない。被害は大規模なものだったので教会や民間団体も総動員しなければならない。島中央部の被害者たちに対して、全国および海外からの支援者たちからの寄付をお願いしている。すでに数千件からの返事があるけれど、将来最悪の事態も予想されるので、さらに多くの支援を必要としている。いつまで災害が続くのか誰にも分からない。すぐさましなければならないことは、災害にあって困っている人たちへの復旧活動である。これから寄付してくれる方々に申し上げたいことは、これらの避難者はチャリティ活動の対象ではないということだ。むしろ、彼らは自然災害の犠牲となった「生産的な市民」であることを強調したい。

彼らを助けようと、世界各地から救いの手が差し延べられている。日本でも同様に暖かい心の人々やグループが、被災者を援助してくれている。事態は逼迫しているので、人々は事務的な援助を必要としている。

自然の破壊力を克服することができる力があるとすれば、それは人々の力であり、フィリピンでは、それをピープルパワーと呼ぶ。

御協力頂ける方は下記の連絡先までお願いします。
中谷　公子（0734-53-0908）
Josie Rayos del Sol（0734-54-5161）

（訳　林　良昭）

ＷＩＮコンコード設立趣意書

現在社会は、政治・経済・文化のすべて分野で、地球を一つの単位として捉え、はじめて、その機能を充分に発揮しうる状況に至っていると思われます。そして、このかけがえのない地球の責任を担っているのは、たった一つの「種」に留まる「ヒト」即ち人間であり、その一人一人の人間が確立された個として、地球の貴重な構成要素としての役割を果たすことが求められています。民族の違いは、多様な文化の豊かさを示すにすぎず、国境は行政を効率的に行うための境界にしかすぎないのです。

ＷＩＮは、人間の知恵を結集し、愛すべき郷土和歌山が、人間味溢れるネットワーク（ＨＡＮ Human Active Network)で結ばれた、活性化された地域となるために活動するものです。そして、世界各国から勉学の場を求めて留学して来る人々に、より良い環境を整えることは、ひとつの単位となった地球上に「ＨＡＮ」を構築するうえにおいても重要なことであり、これにより、地球のひとつの地域である和歌山が、世界とダイレクトに結びつき、和歌山の優れた文化が世界に紹介され、地球の多様で豊かな文化環境の醸成に寄与できるのではないかと考え、我々は、ＷＩＮコンコードを設立するものです。

ＷＩＮコンコード事務局
〒640 和歌山市大谷２６４－２１
TEL 0734-52-7474 FAX 0734-52-6050